

多様な背景をもつ留学生の教育
—スポーツ留学生の場合—
Education of International Students with Diverse Backgrounds
-The Case of International Sports Students

亀山泰, 専修大学大学院生
Tai Kameyama, Senshu University

1. はじめに

本発表では、スポーツ留学生の日本語教育や学業のサポートについて、スポーツ留学生と受け入れ側のそれぞれのニーズを明らかにする。

スポーツ留学生というのは、「スポーツ選手としての留学、または競技力向上や、そのための練習活動を行うことを主目的として、日本に滞在している外国籍留学生」（松元・高橋、2009）である。

学術目的の留学生は、入学時に高い日本語能力が求められ、入学後も留学生対象の日本語クラスがある。しかし、スポーツ留学生の場合、必ずしも日本語能力や学力が問われるとは限らず、大学で彼らのための日本語クラスがない場合もある。来日した時期も日本語力も学力も、学生の背景は様々である。

2. 先行研究

松元・高橋（2009）は質問紙を用いた面接調査を行い、スポーツ留学生は運動部に費やす時間が多く、日本語や大学の勉強が疎かになっていること、大学側の受け入れ体制、支援体制が整っていないことを指摘した。

三代（2014a）は、ライフストーリー研究を行い、スポーツ留学生の学習言語能力の不足と、留学生本人が生活言語能力だけで充分だと考えていることが問題だと指摘し、その学習者にどのような日本語が必要か考えることと、学ぶ意味が必要だとしている。

また、三代（2014b）は、セカンドキャリアを考えると大学を卒業しておく必要があることを指摘し、ライフストーリー研究を通して、スポーツ留学生が獲得したいアイデンティティをともに考えて見つけること、今のコミュニティの外の人との出会いを作ることが、セカンドキャリア支援になると述べている。

池田（2019）は、ライフストーリー研究を行い、進路選択における動機づけのために、獲得したい自己像を他者との相互作用の中で発見し、成長させていくことができる学びの場を提供する必要があると述べている。

渡辺（2022）はスポーツ留学生を対象に、ラグビーの語彙リストを作成して訳をつける、タスクベースの教室活動を行った。インフォメーションギャップ、インタラクションを活用しており、タスクベースの授業の有効性が示唆された。

スポーツ留学生を対象とした日本語教育の研究は、まだ先行研究が少なく、さらに調査が必要である。また、先行研究ではスポーツ留学生のニーズを調査しているのみで、チームメイトや監督など、周りの日本人に調査をしていない。本人だけでは気が付くことができないニーズも、調査が必要である。

そこで本発表では、スポーツ留学生と、周りの日本人にインタビュー調査を行い、スポーツ留学生のニーズを明らかにし、日本語教師ができる支援を考える。

3. インタビュー調査

まず、今回調査を行う関東の私立大学（以下 A 大学）で、バスケットボール部の監督に、バスケットボール部の留学生の人数や出身、日本語能力などの事情を聞いた。

その後、監督にバスケットボール部のスポーツ留学生 2 名と、スポーツ留学生と一緒に生活している日本人選手 2 名を紹介していただき、インタビュー調査を行った。

留学生選手のインタビュー調査で質問した内容は以下のとおりである。

1. 属性（出身、母語、母語と日本語以外に使う言語、宗教）
2. 来日以前（競技歴、中学での学業と競技のバランス、教育を受けた言語、日本への関心や知識、日本語学習歴）
3. 高校の入学形式（日本の高校に来たきっかけ、時期、他の選択肢）
4. 高校生活（学業と競技のバランス、日本語学習）
5. 大学の入学形式（大学を選んだ理由、入試の内容、入試の難易度）
6. 大学生活（授業の難易度、単位が取れているか、誰かが助けてくれるか、現在の日本語学習とサポート、生活、競技、勉強で困ったこと）
7. 今後について（具体的にどのような日本語のサポートが欲しいか、スポーツ留学生対象の日本語の授業があったら履修したいか、将来についての考え、将来のためのサポートの現状とニーズ）

質問はこの順番ではなく、会話の中で聞けるものから聞いていった。

日本人選手には 6. 大学生活についてと、必要な日本語のサポートについて、留学生選手を見てどう思うか聞いた。日本人選手は 2 名一度に話を聞いた。留学生選手と日本人選手へのインタビューはボイスレコーダーで録音し、後日テキストファイルに起こした。

4. 結果

4.1 監督

現在 4 年生（留学生選手 A）と 1 年生（留学生選手 B）、2 名の留学生選手が在籍している。8 年前に初めて受け入れた留学生は日本語能力が足りず、授業は全く分からず、生活でも言葉が通じないことがあった。大学を退学し日本でプロ選手になったが、ビザを変更する際、入管では「留学ビザ＝学業」という考えで、なかなか認められなかった。その後は日本語力の高い学生を入れるようにしたが、留学生選手 A も、経営学科の専門用語や漢字が難しく、単位を落としてしまい、ビザの更新で、なぜ成績が悪いのか監督に理由書の提出が求められた。

役所の手続きなどは監督が一緒に行ってサポートしているが、友人やチームメイトとの日常会話は日本語で問題なくできている。

4.2 留学生選手 A

コンゴ出身、母語はフランス語、中学までの教育はフランス語で受けた。外国語として英語を学んだ。

高校入学時にエージェントの紹介で来日した。

高校で初めて日本語を学んだ。高校では留学生の日本語クラスがあり、1年生の時は普通の授業を受けずに日本語の授業とスポーツのみ。2年生から普通の授業を受け、時々日本語の授業もあった。2年生で N3 を取得した。3年生は日本語の授業はなし。大きな寮で、留学生も日本人学生も一緒に生活していた。

大学は監督からのオファーを受け、面接試験で入学した。大学の授業は漢字も専門用語も内容も難しく、分からないときは教授や友達やチューターに聞くが、全て答えを得られるわけではなく、チューターが付くのも一部の授業だけなので、課題やレポートに困っている。一緒に授業を受ける、課題、レポートを一緒にやるサポートが欲しい。競技や生活は問題ないので、今は日本語を学習していない。

将来は日本でプロ選手になろうと考えている。

4.3 留学生選手 B

セネガル出身、母語はフランス語で、中学までフランス語で教育を受けた。留学希望だったため英語も学んでいた。

高校1年生の10月に、エージェントの紹介で来日した。留学生用の日本語クラスで初めて日本語を学んだ。日本語教師、友人、先輩、アシスタントコーチが皆優しく、意欲的に日本語を学習していた。

大学入学は留学生選手 A と同じく監督からのオファーを受けて面接を受けた。大学の授業は難しいが、学部の友人たちやチューターが教えてくれる。わからないときはすぐに聞くのが大切だと思っている。漢字が難しいので、暇な時間に本を読んで漢字の勉強をしている。もっと日本語を勉強したい、プロ選手を引退した後のためにもきちんと卒業したい。競技で使う言葉は問題ない。生活では、イスラム教で豚を食べないが、成分表示が読めないなので、買い物は誰かと一緒に行って成分表示を読んでもらっている。いずれ自分でできるようになる必要がある。

将来はアメリカで NBA の選手になりたいが、いま日本にいるので難しいかもしれない。アメリカに行けなかったら日本でプロになりたい。

4.4 日本人選手

留学生選手 A は、日常生活は問題ないが勉強は無理がある。課題は周りを頼っている。授業に出る意味を感じていないようで、ビザのために出席している状況である。プロ選手になる可能性が高く、プロ選手になるには大学を卒業できなくても問題ない。

留学生選手 B は、日常生活はゆっくり話せば問題ない。しかし、試合中、指示がわからなくても返事をしている。また、士気を高める言葉が通じないことがあるが、日本人選手も試合中は教えている余裕がない。

スポーツ留学生は日本に来て数年で、興味があるとは限らない分野の大学の授業を日本語で受けるため、日本人と同じ評価では難しすぎる。Google Classroom

の英語対応、課題やレポートを母語や英語で提出できるようにする、できる課題を出すなど、無理が無いように学校側が対応するのが良いのではないかと。

5. 結論

留学生選手 A、B は、生活言語能力は身につけているが、学習言語能力は不足している。しかし、生活言語能力と学習言語能力を分けて捉えておらず、「学習言語能力が足りない」と自覚していないと考えられる。現在 A 大学では、スポーツ留学生の学習言語能力を伸ばすためのサポートがないため、授業が難しい、漢字がわからない、そして単位を落としてしまうこともある、という状況になっている。

さらに、もし学習言語能力を伸ばすサポートがあったとしても、スポーツ留学生本人に勉強したいという気持ちがなければあまり効果がないことが予想される。留学生選手 B は勉強にも積極的だが、A は授業への動機づけを高める必要がある。

動機づけについては、大関（2010）で、以下のように述べられている。

動機づけには「統合的動機づけ」「道具的動機づけ」があり、長期的に見れば統合的動機づけのほうが重要であるという主張もされてきた。教育心理学の分野では「内発的動機づけ」、「外発的動機づけ」があり、教師は学習者の内発的動機づけを高める必要がある。動機づけの高さと学習成果は、相互に影響し合う。教室学習者の場合、ニーズとの関連、退屈でない教室活動、教師の教え方や人柄が合うかなどが影響する。動機づけは常に変動し、その上がり下がりには日々の教室活動が関わる。

三代（2014a,b）ではセカンドキャリアへの考えと学びへの積極性の関連が述べられていた。今回行った調査でも、留学生選手 B はいつまでもバスケを続けられるわけではないから大学を卒業しておく必要があると自覚していた。留学生選手 A に関しては、プロ選手になることを想定しており、日本人学生は、バスケの上手い留学生選手は、プロ選手になるためには大学卒業は必須ではないのが現状で、卒業する意義を特に感じていないのではないかと話していた。この結果からも、セカンドキャリアを考えることと学びへの積極性の関連がうかがえる。

日本人選手へのインタビューからは、スポーツ留学生本人の認識と、周りの視点のずれがあることが分かった。

留学生選手 A は課題やレポートに困っている一方、日本人選手は課題やレポートで頼られて二人分のレポートを書いて大変だと話していた。留学生選手 B は競技では困っていないという一方、日本人選手は伝わっていないことがあるという。また、留学生選手 AB どちらも、役所の手続き等は監督と一緒にしてくれるから大丈夫だと言ったが、卒業したら監督と一緒にいけない。このような、本人が気づいていない、または重視していない重要な点が分かった。

留学生選手 B は高校で日本語の勉強が楽しかったためやる気が起きたと話した。日本語教師と学部の教授と部活の監督が連携し、勉強を楽しい、役に立つと思ってもらうこと、大学の授業を全て日本語で、ではなく、母語も活用しながら

苦手意識を持たずに無理なく楽しく学べるようにすること、さらにニーズを調査し、ニーズに合わせたクラスを開講することが、今後求められると考える。

6. 今後の課題

本発表では、2名のスポーツ留学生と2名の日本人学生にインタビューを行ったが、4名ともバスケットボール選手の男子学生である。今後は他の競技のスポーツ留学生や、女性のスポーツ留学生への調査をすることで、違う問題点やニーズが見える可能性がある。また、スポーツ留学生は高校から来日する場合、日本語は高校で覚えることになる。高校の運動部の監督や、高校の日本語教師にも、話を聞いてみたい。

参考文献

- 池田智美 (2019) 「大学スポーツにおける学習支援とキャリア支援—スポーツ留学生に着目して—」『京都産業大学総合学術研究所所報 14』pp75-88 京都産業大学総合学術研究所
- 大関浩美 (2010) 『日本語を教えるための第二言語習得論入門』くろしお出版
- 松元秀雄・高橋直人 (2009) 「外国人スポーツ留学生の日本の大学への受け入れの現状と課題～ラグビー選手に着目して～」『順天堂スポーツ健康科学研究』第一巻第二号 pp214-224 順天堂大学
- 三代純平 (2014a) 「学習言語能力の「問題」は誰の問題か—スポーツ留学生 A のライフストーリーから—」『徳山大学総合研究所紀要』第 36 号 pp89-103 徳山大学総合研究所
- 三代純平 (2014b) 「セカンドキャリア形成へ向けた文化資本としての日本語スポーツ留学生のライフストーリーから」『言語文化教育研究第 12 巻』pp221-240 言語文化教育研究会
- 渡辺史央 (2022) 「外国人スポーツ留学生を対象とした日本語授業の一考察—専門語彙リスト作成とタスクを取り入れた実践—」『高等教育フォーラム』pp13-24 京都産業大学